

幼児のための粘土遊び設備の構築

前嶋 英輝

Environment for Infant Clay Play and the Clay Topos

Hideki MAESHIMA

Abstract

The purpose of this research is the study of the environmental model of infant education through the investigation and analysis of playing with clay.

I asked almost all nursery schools and kindergartens (1,200 facilities) in Okayama and Shimane to complete a questionnaire concerning the environment surrounding those infants playing with clay within the childcare facilities. As a result, it has become clear that nursery teachers believe that playing with clay is a very important activity. However, rarely is natural clay used, and even in the case of toy clay nursery teachers rarely make use of it as a learning aid. Additionally, there were few materials available to aid the adoption of this activity as a subject.

The importance of “good environmental maintenance and other suitable techniques” to the education of infants is, here, demonstrated. Therefore, we will stress independent learning within the environment with regard to creating the foundations of a human’s development during infancy.

Key words : Infant, Clay Topos, Environment

キーワード : 幼児, 粘土場, 環境

1. はじめに

「砂場はあるのになぜ粘土場はないのか」という問いから始まった活動は、保育園の子供達との遊びや保育現場へのアンケート調査から新たな問いへと広がりを見せている。多くの保育関係者が、触覚的経験や粘土の遊びが重要と考えている。しかし一方

で、絶対的に粘土遊びの実践が少ないことが分かってきた。そこで粘土場の実践をもとに人間の発達に関わる広い視野から眺めた「粘土遊びに関する幼児造形教育法の確立」を考えてみたい。

粘土遊びという分野は、保育の歴史の中で大きな発展を示してこなかった。それには3つの理由があると考えられる。第1の理由は、指導者が遊びの主



「粘土場の遊び」

体になってしまう点にある。多くの場合保育者の造形イメージを基に、保育計画が作成され実践されてきた。ことに土の粘土遊びの実践は大変だという先入観があったとも考えられる。第2の理由は、粘土の管理の問題である。絵は重ねて保存でき、掲示も比較的長期にわたって可能である。しかし、粘土は、展示には平らなスペースが必要であり、壊れる可能性も高い。油粘土の場合、手にも油がつきガラスや積み木を汚すことにもつながり敬遠されやすい。土の粘土の管理となるとさらに理解度は低い。第3の理由は、粘土遊びに対する指導力にある。保育士や幼稚園教諭の養成校における造形分野の単位数は、日々の造形表現の頻度に比べて十分とはいえない。さらに粘土遊びに関する経験的学習時間は極めて少ない。これらの理由を考え合わせると、我が国の粘土遊びは、①保育内容、②教材論、③指導者養成の点で改善の余地があるということになる。

そこで生態造形教育学という学術分野を提案したい。ギブソンが提唱した理論は、「環境が生物に対して意味や価値を提供する」という意味で、先の3つの理由をカバーできる理論的な造形教育法を作るために有効であると考えた。まず何よりも「子供が主体の遊び」を作ること、そして子供が素材に入り込む遊び経験を経験できること、さらに指導者が環

境として子供に自由を与えられること、これらを中心に認識と行動に関する生態造形教育学として粘土遊びの造形教育について考えてみよう。

2. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究の目的は「粘土遊びに関する幼児造形教育法の確立」であり、具体的には次の3つが挙げられる。

- ① 粘土遊びの教育目的と指導モデルを提案する。
- ② 粘土遊びを動くイメージを伴う造形思考の場とする。
- ③ 保育現場に粘土遊びの環境を構築する。

つまり粘土遊びに関する「ひと、こと、もの」の環境を整えることにより、幼児造形教育を通しての人間形成に寄与し、子供達にとって楽しい粘土遊びが増えることを目的としている。

主に粘土場という遊び環境を通して、「幼児の行動から始まる思考」について調査した。造形活動において、保育者の持つイメージが優先する場合、幼児のイメージ形成は思考から始まる。これに対して、幼児自らの行動が思考を引き出すことを大切にする事で「やってみたい」気持ちを育てることができると考えた。

(2) 研究の方法

研究の方法として実践を中心に保育環境に関する研究を進めた。

- ① 遊びと造形教育に関する先行研究
- ② 先進園の視察（イタリア：レッジョ・エミリア、ボローニャ、国内：大地太陽幼稚園、和光保育園）
- ③ 粘土場の実践（高梁中央保育園、高梁幼稚園、ゆうき幼稚園、旭東小学校、順正キッズクラブ）
- ④ 生態造形教育学の研究（ICPAへの参加）
- ⑤ アンケート調査（保育園、幼稚園）の分析

まず粘土場の実践と同時に、先行研究として文献研究と先進的な取り組みの視察を行った。粘土場において0歳から5歳のクラスにおいて、粘土遊びの発達と乳幼児の粘土遊びの可能性について調査した。またレッジョ・エミリア市の保育の調査、生態学的な研究の導入を行い、粘土遊びの経験の意味について明らかにすることを試みた。さらに保育者へのアンケート調査を行い、粘土遊びの課題を明らかにした。

3. 遊びの分類と環境

(1) 遊びの分類

粘土場での遊びは「遊びに始まって遊びに終わらなければならない」と考えている。本来子どもの活動は、子ども自身で選び決定しなければ遊びとして成立しない。ホイジンガは、遊びを次のように定義している。

「遊戯とはあるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行なわれる自発的な行為、もしくは活動である。それは自発的に受け入れた規則に従っている。その規則は一旦受け入れられた以上は絶対的拘束力を持っている。遊戯の目的は行為そのものの中にある。それは、緊張と歓びの感情を伴い、またこれは〈日常生活〉とは〈別のものだ〉という意識に裏づけられている。」

遊びの目的が行為そのものの中にあるということは大変重要である。ヴァレリーは「遊戯の規則に対しては懐疑ということはある」と言っている。例えば囲碁を行う人はルールに対して違反したいとは思わないということである。ホイジンガは規則そのものを破る者はインルーシオ (inlusio 幻想) を奪いさるといい、この言葉には同時に協調、平衡という意味があり、その含蓄の深さに驚いている。

カイヨワは、ヴァレリーの「興味が縛りつけたものを、倦怠によって解き得る」という遊びの定義を

引きながら、「参加するように強制されれば、遊びは、遊びであることをやめてしまう」と述べている。つまりいつでもやめることのできる自由が保障されていなければ、その活動自体が苦痛となるのである。子どもたちは、大人が考える幼児の造形活動よりも、はるかに興味を持って活動そのものに参加し、またその完成度に関係なく自分の活動に満足を得ているのである。

現在の保育環境をこの考えに照らしてみると、「いつでもやめていい遊び」は自由保育の方法もしくはその時間帯の遊びということになる。しかし設定保育で遊びの入り口を示し遊び方を示した後、自由を与えることができれば保育者自身が子供にとっての環境になれるはずである。

カイヨワは遊びを次の4つに分類している。①アゴン (Agon 競争) ②アレア (Alea 運) ③ミミクリー (Mimicry 模倣) ④イリンクス (Ilinx 眩暈) これらを四分円とするとその上下にパイディア (Paidia 子供らしさや気まぐれ) とルドゥス (Ludus: 努力忍耐を要する) を置いて立体的な遊びの地図を作っている。造形遊びを学習として考える時に極めて示唆に富んでいる。しかしこの分類を粘土遊びの種類に当てはめるのは、少し範囲が広すぎるようである。そこで造形遊びについての分類を参照してみよう。

林健造は造形遊びを、想像の系、技術の系、伝達の系に分類した。基本的には描画遊びを想定したものであるが、粘土遊びについても当てはめることができる。さらに粘土場の遊びには身体的遊びと造形的遊びの極を想定することができる。また岡田清は描画指導について「概念くだきの方法」を提唱して、上手な絵を描かせることへの注意を促している。「チューリップの花の上は三角が3つ」というような概念は、イメージの拡がりを妨げるだけでなく、風に揺れるようなイメージの動きも消してしまう。このように描けばいい絵が描けるというような教育

大地太陽幼稚園では、「美的感動」「知的感動」を深く体験できるように、環境を深くシンプルに配置している。北海道という四季の美しさが直接子供達の遊びに反映されている。土と水で遊ぶことを重視しており、大きな土山で水を流しながら全身で遊ぶことを雪の季節を除き年間行っている。どろんこ遊びの後には、五右衛門風呂に入って、保育活動が続いていく。この園の子供達は、粘土が土と水で作っているということを体全体で知っている。したがって「土絵の具アート」の作品も土絵の具という素材ではなく、自分の知っている土の力をアートに借りる形をとっているのであり、単なる飾り作りの造形遊びではない。ここで学ぶべきことは、造形遊びの指導は、指導案で切り取った遊びではなく、時間的に継続した環境が子供達に与える意味と価値で構成されるということである。

4. 粘土場の意味と価値

1997年から子どもたちと粘土遊び教室を行ってきた。2007年6月からは、高梁中央保育園に「粘土場」を設置し、0歳から6歳までの子どもたちの遊びを研究してきた。粘土場とは「一年中自由に大量の粘土で遊べる場所」である。

粘土場の遊びの基本は「遊びに始まって遊びに終わる」ことである。そこで「今日は～をしたいと思います」という導入の設定保育ではなく、環境としての粘土の最初の配置（マトリクスと呼んでいる）と最小限の声かけのみによって導入を行うことで、子ども達の主体的な活動を大切にしている。そこから生まれるイメージが「ワニの家」や「恐竜の国」などのような遊びとなって発展する。このような試行錯誤が可能な粘土遊びが、レジオ・エミリア市の幼児教育に見られるようなプロジェクト学習にもつながると考えている。このような造形思考を「行動から始まる思考」として捉え育んで行くことを粘

土場の目的としている。

これらの遊びの様子は、可能な限りビデオ等で記録し、保育者と研究者との間で検討され、共同して保育が進められるように配慮している。保育者が最大の環境であり、指導案や週案（指導案等参照）の段階で共同研究を行うことができれば総合的な遊び環境が充実すると考えられる。また保護者に対しても活動の様子を公開することにより、家庭での対話や描画が進み、造形遊びが日常的に存在するように配慮している。

(1) 視覚型と触覚型の絵画表現と粘土場の影響

子どもたちは、珍しいものが大変好きである。知らないもの見たことのないものにも自分なりのイメージを作り上げる。「アンモナイトの国」の活動では、「アンモナイトの国はどんな所だろう」という声かけでアンモナイトの本物の化石を見せて導入を行った。またイメージの動きや膨らみだけでなく、描画表現の「視覚型」「触覚型」についても着目した。そこで「(a) 声かけのみ」「(b) 500gの油粘土で遊んだ後」「(c) 粘土場で遊んだ後」の描画について分析を行った。

視覚型の場合：全体を構想して描き始め、単体は小さくなる。

触覚型の場合：描きたいものから描き始め、単体は大きくなる。

(a) 声かけのみの描画：視覚的な既成概念の場

特徴：基底線あるいは水平線の存在



(b) 油粘土（500g）で遊んだ後の描画：思考の場

特徴：空間意識、積み上げ遠近構図



(c) 粘土場で遊んだ後の描画：触覚的な想像の場
特徴：構造的、透視図法



「視覚型」と「触覚型」を行き来する子ども達の分類を試みた。①と③の場合、絵の中で最大の単体を選び大きさの比較を行った。ワード法によるクラスター分析による分類を行ったところ粘土場遊びによって大きく触覚型の絵に変化する子どもの存在が認められた。

(1) マトリクスや道具の影響

造形活動の環境が幼児の遊びの中で意味や価値として利用されるシステムを生態造形教育学として確立するためには、子供達がどのように粘土場を利用するのかということをはっきりさせる必要がある。遊びの事例を紹介し、子供が遊びを始める時の環境の意味を抽出する。具体的には、粘土場の運営に関して、保育者と補助者が環境システムを構築する方法を示す。重要なポイントは環境が子供達に価値を提供し、「動いている映像」をイメージしながら遊びを現実の経験として体験することが出来るようになることである。大地が人に歩くことを提供しているように、この経験が子供達に「興味を持って学ぶ」ための地平を形成すると考えている。マトリクス(粘土の最初の状態)や道具、そして人的環境が、子供

達の遊びや行為にどのように影響しているのかを環境の意味としての視点から調査を行った。

1) マトリクスの種類による影響

例のようにマトリクスは様々な状態が考えられる。マトリクスに加えて保育者の声かけにより、①身体的遊び、②造形的遊びに分類することのできる遊びが展開される。またマトリクスの造形的協同的な要素への影響としては、例えば30cm棒型粘土を使用した場合、粘土を素材として認識し個人的遊びが始まる傾向がある。一方3つの座布団型粘土を使用した場合、粘土を場として認識し協同的な遊びが始まる傾向が見られた。





また具象的な粘土の形（大きなワニの形など）をマトリクスとして設定することもできる。絵本の読み聞かせの導入と合わせて設定することも考えられるが、指示が強すぎる傾向がある。

基本的にはシンプルなマトリクスの設定が良い。シンプルな始まりが子供達の行動から始まる造形思考を動かしているのが観察された。

2) 道具の種類による影響

粘土場では、基本的に手で粘土に触れながら遊びを行うため最小限の道具しか置いていない。ここでは次の3つについて例示する。

クレイカッター

（細い金属の両端に木の取手をつけたもので粘土を切る道具）

粘土を切ることで自分が遊びとなる。また切り方の工夫をする中で抽象的な形の面白さに気付くこともある。

土搔ベラ

（棒の先に金属の輪がついていて粘土を搔きとる道具）

掘ること自体が遊びになる。砂場でトンネルを作る遊びに似ているが、粘土の場合手では掘りにくいのでこの道具を使う。掘る時にできる粘土の形がジオラマ的な遊びを発想させる場合が多い。

道具を使う場合の注意点は、遊ぶ子供の人数分以

上道具があることである。粘土も道具もいくらかもあるという安心感が自由なイメージ世界を保証している。

粘土板

（一般的に油粘土の作業台として使用する。粘土場では粘土を片付ける時に使用している）

粘土板を置いた上で粘土遊びを始めると、板の輪郭を空間に見立てて絵画的な遊びになる場合がある。保育室で飼育箱のカタツムリを見ながら導入し500gの油粘土で活動を行った場合、絵画的な表現が現れた。一方、粘土場で本物のカタツムリを粘土の上に置いて導入を行った場合、子供達の想像は広がり、きのこの屋根の下にカタツムリのための映画館を作るような立体的な広がりのある自由な発想が見られた。

つまり、子ども達の造形思考の順番は、保育者主導の活動ではイメージが先行し（ことに保育者の期待するイメージ）、粘土場のような環境での主体的で自由な活動では、行動が先行する中でイメージが連続して引き出されてくるということが分かる。

幼児の造形活動に対して、物的環境や人的環境は意味や価値として影響を与えていることが調査結果に表れている。「環境による保育」は今までも研究されてきたし、保育プログラムとしても多くの事例がある。しかし問題は、子供にとって環境が意味のあるものとして遊びに利用できるのか、あるいは

保育者によって環境の利用方法を指定されているのかという点にある。

子供が主体的な造形活動を行うためには、保育者の指示でなく、環境そのものから直接に意味や価値を利用できることが重要である。保育者と造形活動補助者の協同が、子供に「動いている映像」をもとにした、環境から始まるリアルな経験を可能にする。

今回例示したものだけでは不十分であり、環境システムの詳細な研究を生態造形教育学として確立することが必要である。

5. 粘土遊びの環境の準備方法

(1) 粘土遊びの環境づくり

粘土遊びの環境について5つの方法を提案する。

- 1) 粘土場（彫塑用粘土，陶芸用粘土）
- 2) 共同使用土粘土（土の粘土）
- 3) 共同使用油粘土（油粘土）
- 4) 粉粘土による粘土遊び（土の粉粘土）
- 5) 他の粘土
 - 1) 粘土場の設営については次に詳しく述べる。土の粘土を1年中使用するためには環境づくりが重要である。
 - 2) 土の粘土を継続して使用するためには、粘土を乾燥しないことが必要となる。粘土場ほど大がかりでなく土粘土を使用する場合は、使った後大きなバケツに入れることが多いがこの方法では次回使いにくい。水を入れて柔らかくしても取り出すのが困難であり、粘土を死蔵することになる。やはりコンテナボックスに保管すると使いやすい。収納も積み上げられるので場所をとらない。15kg程度ずつに小分けして濡れた布でくるみナイロン袋に入れて空気を出して密閉してからコンテナに入れておけば、2～3ヶ月は柔らかい状態が保てるので、硬くなる前に

出して使用するのが良い。硬くなったら粉粘土と同じように水干して練り直す。あまり硬くならないうちにしっかりと湿らせた厚めの布で包んでからナイロン袋で密閉しておけば柔らかさを戻すこともできる。

- 3) 油粘土もある程度の量があれば手軽に立体表現を楽しめる素材である。できれば1人に3～5kg程度準備したい。使用後は、コンテナボックスに小分けして積み上げておくと使いやすい。活動の途中で追加する粘土も予備に準備しておくことが大切である。十分な粘土の量が安心してイメージを広げられることにつながる。
- 4) 粉粘土は粘土の素材としての成り立ちを知る上で意味のある遊びである。粉粘土は陶芸用の粘土と同様に購入できる。但し一度水で練るとさらさらに戻すのは難しいので、20cm程のサイコロ状にして乾燥して保存し、水につけるとさらさらになる。水の量を加減してちょうど良い硬さにするのは難しいが、先日に板の上に出して干すとちょうどいい硬さの粘土が作れる。陶芸では水干という。

粉粘土を粘土遊びに適した硬さに練るのは幼児には難しいので、粘土作り体験として小学生と協同するのも連携の良い機会になる。
- 5) 他の粘土として、今回調査した中にあった紙粘土、木質粘土、小麦粉粘土、片栗粉（ダイラタンシー）、スライム、クレイアニメ用粘土など様々な粘土遊びの材料が挙げられる。

(2) 粘土場の設営方法

粘土場は、現在約1tの粘土を循環しながら使用している。約32平方メートルのフロアで15人程度の幼児が500kg程の粘土で一年を通して遊んでいる。

粘土場は、「砂場はあるのになぜ粘土場はないのか」という考えから始まった。砂場の重要性が示すように、子供にとって触覚的で立体的な遊びは重要

である。粘土場は、砂場の遊びに細部の造形を可能にした。造形表現においては、大切な思いは細部に宿ることが多い。表現遊びとしての活動がイメージの想起を継続する経験として蓄積される。このことは、ほとんどの子供が一年中を通して、毎回2時間以上飽きずに遊び続けることから推察される。

粘土場では、0歳から6歳までの子供の遊びの実践を行っている。粘土場の環境が提供する遊びの深まりをデジタルカメラやビデオで記録し、保育者と遊びについて話し合いを行う。レジヨのドキュメンテーションの考え方を参考により良い保育環境を形成することを考えている。

参考のために粘土場の設備として必要なものについて例示し説明する。現在使用しているものを価格も含めて参考に示すことで、現場での実践の増加を期待する。

粘土

彫塑用粘土 1t (高橋粘土店：特荒2,100円/10kg)

陶芸用粘土300kg (福島釉薬：信楽土2,100円/20kg)

土練機 (SHIMPO NRA-04S：315,000円) (吐出能力400kg/時)

粘土槽 (ダイライトR型角槽R300：70,800円)

白ビニールシート (約3,000円)

コンテナボックス (TAG BOX 03438*293*245)

道具

クレイカッター太線T柄付 (福島釉薬：350円) (細い紐で粘土を切る)

カキベラ (竹内製作所：2,000円) (先に輪のついた棒で掻きとる)

粘土は、彫塑用粘土の方が造形しやすい。しかし焼成する場合は陶芸用の土を使うべきである。釉薬も各種準備している。粘土はきちんとビニールシートをかけておくと、300kg以上の塊であれば内部から水分が補給され3ヶ月以上使用可能な状態が保て



「粘土場の設備」

る。週に1回以上使用しながら遊びの中で練り直すことが望ましい。ただし遊びの中で練ると子供達の興味が集まり行列ができてしまうので、「粘土屋さんごっこ」と名付けて練る遊びとして行うことが必要である。

土練機は値段が高いことが問題であるが、大量の粘土を練ることができる。吐出された粘土の形が棒状なので粘土遊びの初期設定に適している。硬くなった粘土は粘土槽に入れて水で柔らかく戻して、やや硬い粘土と合わせながら練ると硬さ調節が容易にできる。

現在の設定では、1tの粘土のうち約500kgをビニールシートの端に置いている。(裏表紙参照) 使用後は、そのシートで粘土をくるむことで乾燥が防げる。活動時には、シートを広げて裸足で遊ぶ。上履きを履いたままだと靴の裏の掃除が極めて困難となる。実際に行ってみると裸足の方が子供達にとっても活動しやすい。使用して硬くなった粘土は、粘土槽に入れて柔らかくして土練機で練り直す。白く乾いてしまった粘土は太陽で乾燥させ保存することも可能である。なお粘土場のスペースは、現在離れた棟の一室を冷暖房によって年間を通じて使用しているが、場合によっては軒下などにも設置可能であ

る。ただし屋外では、冬期の粘土の凍結や雨天時の使用に問題が生じる。

粘土場の粘土は、硬さに差があり、子供たちが選んで使用できるようにしてある。粘土の硬さによっても遊びに変化が現れるためである。粘土の使いやすさの硬さを「耳たぶくらい」などと示す場合があるが、質感が違うため分かりにくい。そこで粘土の硬さについて、保育者の共通認識のために硬度を数値化することを考えた。粘土に対して、1mの高さから長さ100mm、太さ4mmの鉄釘を自由落下させ刺さった深さを測定する。鉄釘はどこでも入手可能で、この方法であれば見当がつけやすい。基準としては、10～18mmが造形に適した硬さであり、保育用油粘土の硬さに当たるのは、15mm程度である。また3歳未満の低年齢子どもの軟らかい粘土での遊びには、18～25mmでも良いが、それ以上は水分が多過ぎてぬたくり遊びになる可能性がある。

土の粘土も保育者がしばしば使うことで扱いが理解できる。コンテナに入れて管理することで、油粘土と比較しても土粘土の管理は極めて簡単なものになるはずである。

6. 粘土遊びに関する保育環境調査

本調査の目的は、粘土遊びに関する調査と分析による幼児造形教育の環境モデルを構築することである。

新しい教育基本法には、幼児期の教育が具体的に入り、「良好な環境の整備その他適当な方法」による保育の必要性が示されている。「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の改訂でも、「環境を通しての教育」の重要性が強調されている。その実現のためには、よい遊び場、よく考えられた指導計画が必要である。レッジョ・エミリア市の取り組みでマラグッチが「子どもは100の言葉をもっている」と言ったように、またピアジェが、子どもの発達を構造で示

したように、子どもたちは、生まれながらにして生涯にわたる表現をすべて内包していると考えられる。しかし、保育者主導による知識偏重教育では、物事に関する興味関心が深まらないため指示を待つ子が増えているのが現状である。したがって人間形成の基礎を育む幼児期には、環境の中での自主的な学びが重視される。

保育現場での実際の粘土遊びに関する環境について調査するために岡山県と島根県のほぼすべての保育所（園）と幼稚園1200園にアンケート依頼を行った。結果として、土の粘土の使用は少ないこと、保育用粘土にしても設定保育など保育者が具体的に関わって使用することは少ないことが明らかとなった。また粘土遊びを題材として取り上げるための資料も少ない。しかし多くの保育者は粘土遊びが大切だと考えている事実も浮かび上がっている。つまり保育現場では、粘土遊び、できれば土の粘土を使用した遊びを大切に考えているけれども、その題材設定、土の使用方法や保存方法等の点で実践を出来ないでいることが問題になっている。

実際保育現場での粘土遊びは、描画遊びに比べると教材として取り上げられる頻度が少ない。また1kg程度の保育用粘土での遊びが多く、土の粘土は全く使用されないか、あるいは年に一度の特別な活動に限られる場合が多い。しかし造形性や触覚性などを考慮して造形素材として粘土を比較すると土の粘土が最も優れていることが分かる。そこで18年前から粘土遊び教室を行ない、2007年からは高梁中央保育園に「粘土場」を設置して、約1tの彫塑用粘土で8年間にわたって実践を行ってきた。子どもたちは、イメージを立体的に造形しやすい粘土場の環境によって、長時間にわたって集中して遊べることが分かった。粘土場で実践されるプロジェクト学習は、ピアジェの幼児の量の認識に関する研究に見られるようなイメージや量に関する認識に深く結びついている。4歳前後は、象徴的思考から直感的思考

への移行期であり、体験したことを自分のイメージとして蓄える重要な時期である。この時期に、興味関心を持つ心を育むことができれば、算数や理科、さらに外国語にも興味関心をもって意欲的に取り組む生徒が増えることが予想される。

林建造は、「表現過程の三系」を提唱し、子どもの造形を指導するための指針を示している。現在継続している研究では、粘土場の実践に基づいて「遊びに始まって遊びに終わる造形活動」が幼児の主体的な思考力を育むことを生態学的な視点も含めて明らかにすることを目的としている。具体的には、レッジョ・エミリア市の実践に見られるような子どもの主体性に基づいた造形遊びの一つとして、子どもたち自身のプロジェクトを引き出すための「行動から始まる思考の場」を構築したい。

(1) 調査方法

本稿で中心となる調査方法として、継続した粘土場での実践研究をもとに、質問紙を作成しアンケート調査を行った。保育所（園）と幼稚園では本来の目的は異なるが、保育所保育指針と幼稚園教育要領では、造形表現に関する点についてはほぼ同様の目的と内容を共有するため、本稿では現場の総合的な意見として統計した。

平成24年度末にそれぞれの園の年長、年中クラスの担任に一年間の保育を振り返る形で回答を求めた。高梁中央保育園（岡山県高梁市）において2007年から行っている粘土場の実践と同保育園での基礎調査としてのアンケート結果をもとに分析を行った。調査対象期間：

平成24年度（平成25年3月15日締切）

調査対象：

岡山県島根県内の保育所（園）幼稚園の5歳児、4歳児クラスの担任

岡山県：保育園478園、幼稚園317園（計795園）

島根県：保育園297園、幼稚園108園（計405園）

総計1200園（2400人）

有効回答総数：528園（1051人）

有効回答率：44%

調査方法：質問紙法（5件法、複数選択、記述）

分析方法：単純統計とSpearmanの相関係数による比較

統計ソフト：SPSS

(2) 造形表現について

造形表現についての質問は以下の5件法によって回答を求めた。ここでは5と4、2と1の合計の割合を比較しながら考察を行う。

5とてもそう思う 4そう思う

3どちらともいえない

2あまりそう思わない 1思わない

①自分は造形分野が好きである

（YES 55.3%：NO 13.0%）

保育者を志す学生への入学時の質問では、音楽分野が好きという学生は多いが造形分野は苦手という傾向がある。これは絵を描くのが苦手という理由が大きいかもしれないが、ここでの結果を見ると現場での保育士は、半数以上が造形分野が好きであると感じていることが分かる。どちらともいえないが31.6%であることも考慮すると子ども達と行う造形遊びの中で苦手意識が無くなっていったことが伺われる。しかし、自分の今年度の指導についての質問では、(16)絵の指導に満足が9.8%、(5)粘土の指導に満足が7.3%であり、自分の指導に関して満足していないことが分かる。造形分野を好きになってきているのであるから、保育者のニーズに沿った造形遊びの資料が示されれば子どもにとってよい環境が構成されることに直結するであろう。

②粘土遊びは重要と感じている

（YES 81.8%：NO 1.1%）

多くの保育者が粘土遊びは重要であると感じており、触覚経験の大切さについても関心をもっている

と思われる。しかし題材設定や遊び経験のあり方に広がりや具体性がなく、週に1回以上設定保育で使用する園は9.6%（指導9）に過ぎない。年に数回しか行わない園が43.6%，月数回が20.1%に達している。そもそも個人用粘土がない園が25.8%ある。一方で自由な時間にはいつでも個人用粘土を使ってよいことにしている園が68.2%（指導7）であることは、そのこと自体は良いことではあるが、設定保育の中で粘土遊びが題材としていかに取り上げられにくいかを示している。

また相関係数として項目(2)と「(3)できれば土の粘土も使わせたい」0.394，「(11)園内に大量の粘土で遊べる場所があるといいと思う」0.252という項目が強く相関していることは、保育者が他の保育用粘土や小麦粉粘土，紙粘土などに満足していないことを示している。

相関係数

		造形2	造形3	造形11	
Spearmanのρ	造形2	相関係数	1.000	.394*	.252*
		有意確率(両側)	.	.000	.000
		N	1050	1048	1042
	造形3	相関係数	.394**	1.000	.396**
		有意確率(両側)	.000	.	.000
		N	1048	1049	1041
	造形11	相関係数	.252**	.396**	1.000
		有意確率(両側)	.000	.000	.
		N	1042	1041	1043

**、相関係数は1%水準で有意(片側)です。

③できれば土の粘土も使わせたい

(YES 71.1% : NO 3.2%)

一般的な保育用粘土の造形性，感触や可塑性などに満足でなく，本物の土の粘土での造形遊びの必要性を感じていることが分かる。しかし，「(19)自分は土の粘土の保存方法を理解している」と思っている保育者は，12.3%しかいないことから分かるように実際には教材として取り上げにくい現実が明らかとなっている。

粘土による造形は，描画に比べ作品の保存場所にも困る場合が多く，題材設定や指導案作成の段階で実践を諦めることも多い。付け加えると「土の粘土を使った造形遊びを年に一度は行っている」園は

18.1%（指導2）に止まることに対して，「全身で遊ぶどろんこ遊びを年に一度は行っている」園は80.3%（指導4）であることは，造形的な土の粘土の遊びよりも，触覚的な素材体験としてのどろんこ遊びを重視しているといえるかもしれない。この点から土の粘土の具体的な遊びの提案が求められていることが分かる。

④粘土で形を上手につくる技法をきちんと教えた
い (YES 40.5% : NO 17.7%)

上手に作る技法という質問は，2つの意味に取ることが出来る。思いを達成できる技術的基礎を身につけるといふ意味と何を作っているか分かるように作る方法という意味である。当然子どもにとっては前者が重要であり，後者は大人が考える技術である。ここでの回答が「どちらともいえない」42.2%となっていることは，この2つの点に対する迷いであるのかもしれない。

このことは「⑨造形指導では描き方や作り方を順番に丁寧に指示する方がよい」「⑬造形指導の導入では作品例を示して完成をイメージさせている」の「どちらともいえない」が，それぞれ⑨50.4%，⑬41.1%と高くなっている傾向と一致している。

相関係数もそれぞれ④と⑨0.152，④と⑬0.112で有意となっており，指導という問題に対して保育者の悩む姿が見えてくる。「⑱造形遊びでは子どもの自主性を大切にしたい」と思う94.4%，思わない0.5%の極端な差と比べると，指導は必要だが自主性は大切にしたいという問題を解決できる指導方法のモデルが望まれていることが分かる。この点は「⑦全県

相関係数

		造形4	造形9	造形13	
Spearmanのρ	造形4	相関係数	1.000	.152*	.112*
		有意確率(両側)	.	.000	.000
		N	1044	1039	1032
	造形9	相関係数	.152**	1.000	.346**
		有意確率(両側)	.000	.	.000
		N	1039	1046	1034
	造形13	相関係数	.112**	.346**	1.000
		有意確率(両側)	.000	.000	.
		N	1032	1034	1039

**、相関係数は1%水準で有意(片側)です。

や地域での研究会（研修会）は自分にとって有意義である」と思っている保育者が74.3%であることにも無関係ではないであろう。

⑤本年度の粘土を使った指導に満足している
(YES 8.6% : NO 51.3%)

先にも触れたが粘土を使った自分の指導に満足していない保育者が多い。しかし問題は、実践に満足できていないことではなく、実践そのものが出来ていないことにあることは先に述べた。例えばよく見かけるように感じる幼児の焼き物作品は、実は「焼き物の制作を年に一度は行っている」園は、7.6%に止まっている。備前焼などのある岡山や島根でさえこの数値であるから全国的にはさらに少ない実践かもしれない。粘土作品の安定的保存には焼成は極めて理想的な方法であり、地域的に陶芸窯を準備する手段を検討したい。

⑥造形表現ではできた作品よりも造る過程を大切にしたい (YES 84.5% : NO 0.6%)

造形教育に関する保育の歴史を見れば作品主義の問題があり、現在でも保護者がある程度上手だと感じる作品を展示するというような傾向はあると思われる。このことは「(8)展示する場合皆が同じレベルの作品になるように配慮している」に対する回答がきれいに正規分布していることから分かる。ところがこの項目からは、極めて多くの保育者が造る過程を大切に考えていることが明らかになった。このこと自体は子どもの保育環境として良いことであると考えられるが、「(13)造形指導の導入では作品例を示して完成をイメージさせている」ではYES30.2%, NO28.7%であり正規分布を保っている。研究会や研修会での学習や日々の保育の経験から、造る過程を大切にすることは重要であると理解しつつも、現実には「材料や技法との出会いや行為そのものを楽しむ」遊びから「イメージをもって表現することを楽しむ」遊びへの接続がうまくいかないことを示している。保育者の設定可能範囲だけに限定

せず、子供の行動を観察しながら生活環境から柔軟に遊びを引き出すことの重要性が見えてくる。

⑦全県や地域での研究会（研修会）は自分にとって有意義である (YES 74.3% : NO 3.2%)

近年地域を代表して当番で行われる研究会の公開保育の内容に、レッジョ・エミリア市の保育に見られるような子どもの主体性を重視したコーナー保育のような形態がよく見られる。具体的には、木の実などを準備した場所を準備しておいてそれぞれの子どもの思いのままに造形遊びが出来るという形態であり、保育者主導の保育から子ども主体の保育への転換である。

しかし例えば「(12)レッジョ・エミリア市の保育についてよく知っている」のは2.5%, そう思わない保育者は90.8%であった。ことに「思わない」という強い否定を意味する1の回答が72.9%という点は、今回の調査で最高値である。レッジョ・エミリア市の保育を知らないことに問題はないが、保育や美術教育の学会で同じ調査をした場合を想像すると保育現場と保育者養成の現場の乖離を感じずにはいられない。また研修会を有意義と考えている保育者のニーズや地域の研究会の動向を鑑みると保育現場で一般化できる保育研究の必要性が見えてくる。

⑧展示する場合皆が同じレベルの作品になるように配慮している (YES 23.7% : NO 32.7%)

正規分布しており展示そのものの意味や価値が問題となっていることが分かる。絵画展などの是非については議論され続けているが、近年は家庭での日常の描画遊びも含めた優れた展覧会なども開かれている。何れにしてもこの問題を整理するためには、造形遊びから始まる造形表現の中に重要な保育の意義があることを示す必要がある。

⑨造形指導では描き方や作り方を順番に丁寧に指示の方がよい (YES 24.2% : NO 25.3%)

「〇〇式」「〇〇メソッド」など様々な指導方法が存在している。簡単に明治の新訂画帖と比較するわ

けにはいかないが、後者が極めて基礎技術の習熟に特化している点に対して前者は表現の価値に重点を置いている。また単なる作品主義と比較することも出来ない。しかし保育における造形活動は単品としての作品制作であるはずはなく、発達を考慮した継続的な指導内容を必要としていることはいうまでもない。方法論を別にしても調査結果からは途中の声かけなど難しい問題に直面することが多いことも見えてくる。「どちらともいえない」50.4%を含め、この回答の結果からは現場の造形指導に対する難しさが伝わってくる。またこの項目と「(13)造形指導の導入では作品例を示して完成をイメージさせている」の相関係数は0.346と有意に相関している。

⑩家や園でのことを描く「絵手紙」をよく実践している (YES 6.7% : NO 73.8%)

「絵手紙」の実践は、家庭と園を結ぶ絵の連絡帳としても機能している。何より林建造の「表現過程の三系」の「伝達」を活動主題にあげるのに適した題材であると考えられる。しかし調査結果からはほとんどの保育者が実践していないことが分かった。この調査内容では、実践されない理由は明らかにできない。しかし、粘土場での遊びを行う中で日常の経験はイメージとなって現れることは事実であり、絵の手紙として家庭や園での生活を描く遊びは造形表現に貴重な活動である。実践が少ないとはいえグラフの分布がなだらかに連続して並んでいるように、実践は粘土遊びとあわせてモデルを示すことによって広めることができる可能性がある。

⑪園内に大量の粘土で遊べる場所があると思う (YES 48.5% : NO 14.8%)

そう思う保育者が半数とはいえ、相関係数0.396から分かるように「(3)できれば土の粘土も使わせたい」71.1%との相関関係は強い。半数を超えない理由には多くの保育者が「(19)自分は土の粘土の保存方法を理解している」が12.3%であるように、準備などの点に不安を抱いていることが挙げられるかもし

れない。この点については、高梁中央保育園やゆき幼稚園での6年間にわたる実践例を参照しながら、保育者に粘土場の経営が可能であることを示すモデルをつくる必要がある。また室内だけでなく園庭に接続する軒下スペースへの粘土場の設置モデルの提示も設置の可能性を広げられる要素である。砂場との連続も造形環境として新たな可能性を持つことになる。

⑫レッジョ・エミリア市の保育についてよく知っている (YES 2.5% : NO 90.8%)

レッジョ・エミリア・アプローチとして世界各地で行われた巡回展などによって紹介され、各国で導入方法が研究されている保育である。しかし米国をはじめ日本でも導入の難しい保育実践である。2013年、2014年にレッジョ・エミリア市とボローニャ市を視察したが、現実にはレッジョ・エミリア市以外のイタリア国内でも導入の難しい実践であることが分かった。主たる理由は経費と人材の問題であるが、レッジョの歴史に見られるような積み重ねが必要である。したがってレッジョ研究においては、直接的なモデルの導入ではなく、なぜレッジョ・エミリア・アプローチが造形遊びを中心に保育活動を組み立てているのかということの本質を見極めることが必要となる。いずれにしてもレッジョに限らず国内外の優れた保育を多くの保育者が参考にしつつその園その担任の独自の保育方法を毎年組み立てられることが望ましい。そのことが「一人一人の子どもの生活や経験、発達過程などを把握し、適切な援助や環境構成ができるよう配慮すること」(保育所保育指針)であり、「幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」(幼稚園教育要領)ということの実現に繋がる。

⑬造形指導の導入では作品例を示して完成をイメージさせている (YES 30.2% : NO 28.7%)

作品例を示す事自体は活動の目的によっては意味

のあることである。また鑑賞の機会になることもある。問題は作品例が子どものイメージ形成の自由をなくす場合と保育者の安易な指導計画による場合である。子ども達は生活の中でまねることによって学ぶのであり、例示した作品の影響力は大変強い。実際に粘土遊びの最中でも友達の造ったものをまねることは毎回のようによく現れる行為である。この項目の回答が正規分布していることから、導入に関する明確な目的意識の必要性が示されている。

⑭粘土遊びの題材は描画遊びに比べると大変少ない (YES 53.1% : NO 15.9%)

設定保育で個人用粘土を使用する回数が、年数回43.6%、月数回2.0%という現実を考慮すると、粘土遊びの題材が少ないと思う保育者が多いことはいずれも。また「粘土遊びで子どもが好きだと思うものに○をつけてください」(指導10)という項目で「型抜き遊び」80.6%という結果も現場の遊びの現実を示している。しかし描画の遊びと比較して、描画の題材となっているものの中には粘土遊びでも可能なものもある。子ども達の生活に眼を移した題材設定、そして目的意識を持った活動主題を意識することで題材の問題は大きく変化するはずである。保育者の題材感が柔軟になるような提案が必要である。

⑮保育の仕事の中で週案などを書くことは苦手である (YES 36.2% : NO 24.9%)

調査結果が正規分布する理由として、週案は日案や設定保育の指導案と違い毎年季節を追いながらある程度同じ内容を計画して行くものであるためと考えた。しかしそうであるからこそ自分で事前に週案を十分に検討することが重要になる。研究会で提示するような詳細な指導案は毎日書くことはできないし、それを書いては肝心の保育や家庭との連絡に支障をきたすことになる。少なくとも勤務時間内には書けない。したがって現実の保育者一人一人にとって毎日の保育のプランは週案やメモが基本になってくるはずである。粘土遊びが設定保育に入る

ことがない理由も週案にもともと入っていないことにあるかもしれない。週案には入っていても先の様々な理由で描画遊びなどに変更される可能性もある。週案が週案として機能するために、安心して粘土遊びが確実にできる環境の準備と週案の具体的なモデルが必要である。

実際に高梁中央保育園の粘土場では、一年を通して少なくとも週1回大量の土の粘土での遊びが可能である。担任にとっても次の日のための準備が少なく天候にも左右されないため安心できる状態にある。つまり活動計画として週案に積極的に組み入れやすい題材となっている。粘土場の遊びは2時間程度ほぼすべての子どもが集中して遊ぶことができるので、全体の子どもへの配慮事項も安心して計画できる。絵画遊びでは個人差もあり集中できる時間も短くなるため個別対応も難しくなるのが現状である。また粘土場での遊びは子どもの協同の点でも週案に組み込みやすい。

⑯本年度の自分の絵の指導に満足している (YES 9.8% : NO 50.6%)

粘土遊びの指導の8.6%、51.3%より少し満足度が高いけれども造形表現全般にわたって厳しい自己評価がなされている。絵の指導は粘土の実施回数よりもはるかに多いはずであり保育者の造形指導への満足度がうかがえる。調査の内訳で「とてもそう思う」が0.4%なのは謙遜も含むかと思われるが、「どちらともいえない」39.7%「あまり思わない」36.3%、「思わない」14.3%である点は問題である。造形遊びの題材自体を保育者主導から子どもの発見的な学習形態へと考え直す必要があると考えられる。子どもが生き生きと活動する姿から学ぶことが何よりも保育者の指導への満足度を高めることは想像に難くない。

⑰粘土でも平面的な作品を作る子は多い (YES 27.6% : NO 36.2%)

この項目は中央に重い結果となっている。つまり

よくわからないということである。粘土場の実践と保育用粘土の実践のなかで、子どもの造形作品が平面的になるかどうかについては、必ずしも粘土の量や素材によるわけではないことが分かってきた。むしろ遊びの種類や造るものをイメージする時の身体的な関係性が立体的な造形の始まりを誘っている。ただし粘土板を使用する場合、粘土板を画用紙のように見立てて平面的な作品になることは多い。また記号的なイメージで造形する場合に平面で表すことが多い。型抜き遊びと平行して造形する場合も平面化しやすい。

平面的な造形遊び自体が問題ではなく、立体的で可塑的なイメージ形成、あるいは子どもの頭の中でイメージが動いているような遊びができなくなることに問題がある。平面的な造形でもイメージが生きて動いている場合はある。記号をスタンプするだけのような遊びでは発展もなく、そもそも活動主題としての目的が霞んでしまうことになる。

⑱造形遊びでは子どもの自主性を大切にしたい
(YES 94.4% : NO 0.5%)

この項目は、今回の調査項目の中で最も顕著な差を示した。もちろん造形遊びだけでなく保育自体が子どもの発達を援助するものであることから考えると当然のことである。しかしここまでの考察を振り返ってみると、この結果と矛盾する点が多く見出される。この矛盾は指導の方法も含めて子どもの主体性という問題に保育者が悩んでいることを示している。「(2)粘土遊びは重要と感じている」81.8%にもかかわらず年に数度しか設定保育に取り上げない事実と同様に、自主性を大切にしたいと思いつつもそのような題材設定や指導内容が実践できていないことが想像できる。現場の保育者は研究会や研修会も有意義と感じ、子どものために満足できる保育計画を立てたいと考えていることが調査から浮かび上がってきた。保育現場で毎日多く実践されている保育内容としての造形遊びに関する現実的な指導法の

研究が急務であることが明らかとなった。

⑲自分は土の粘土の保存方法を理解している
(YES 12.3% : NO 66.5%)

「③できれば土の粘土も使わせたい」71.1%に対する最大の障害がこの点にある。土の粘土の保存に関する多くの失敗例は、大きなポリバケツに粘土を保存することにある。陶芸用粘土を使用することが多いのは問題ない。しかし陶芸では硬くなった粘土を再生する場合、大きな容器に入れ水で柔らかくして練り直すわけであるが、保育現場での作業は極めて困難となる。結果として初めて購入した時にのみ使用した粘土は厄介な保存素材となる。

解決方法は3つある。①使用後に小さいコンテナに分けて乾燥した状態で保存し、使用する前に砕いて粉粘土のようにして水を少量まぜながら使用する。この方法は子どもにも楽しい粘土作りの素材遊びとなる。②使用後に湿布をかけナイロン袋に密閉し小さいコンテナに分けて保存する。できればしばしば遊ぶ方が良い。③土練機を購入し500リットルほどの大きなコンテナを準備して粘土場を設営する。他の方法として小学校との連携で6年生に粘土を練ってもらい、粘土遊びを楽しみながら交流するという考えられる。

また土の粘土として多くの場合陶芸用粘土を購入しているけれども、彫塑用の粘土もあることがあまり知られていない。造形性として大きな差がある。素材に関しても粘土遊びに関する総合的な提案が必要である。

⑳様々な遊びを経験できるコーナー保育は大切である
(YES 87.7% : NO 1.3%)

先に述べたレッジョ・エミリア市の実践は、コーナー保育を子どもが自ら企画している形態といえるかもしれない。この結果から見ても多くの園ではコーナー保育を取り入れているか重視していることが分かる。

現時点で保育者が子ども達の主体性をどのように

して大切にしていこうとしているのかという点とも関係しているであろう。解決策として、このように支持されているコーナー保育に粘土場を導入することを提案したい。子どもの行動や発話から新たな題材が見つかり、満足できる指導に繋がる可能性に期待したい。

ここまでで、多くの保育者は粘土遊びが重要で、土の粘土も使わせたいと考えているが、実際の自分の粘土に関する指導には満足していないということが明らかになった。

(3) 道具や材料について

土の粘土が常備されている園は7.1%であった。しかし個人用粘土72.4%に対して共用粘土が18.9%であることは、2割程度の園ではある程度多量の粘土による遊びが展開されていることが推測される。

個人用粘土72.4%については注意が必要で、常備しているといえども全ての子供の粘土が使える状態になっていることは難しい。多くの場合箱の中の粘土の量が個人別に偏っていたり、粘土が少量になって固くなっていたりすることがある。

個人用粘土は、入園時の必須の購入教材である園が多かったが現在は74.8%の使用ということで準備状態72.4%とほぼ同じになっている。

土の粘土は14.8%であった。一方、紙粘土49.1%、小麦粉粘土39.0%、スライム29.7%などが、可塑性のある遊びの展開を助けていることが分かる。卒園制作で紙粘土を使用する園も見られた。しかし出来れば粘土で作ったものを焼成釉がけして、またとない幼児期の作品として残すことも考えたい。近隣の陶芸関係者との協力で可能となる園も多いと考えられる。

(4) 造形指導について

①粘土は何歳頃から使用するのが良いと思いますか。

最も多かったのは2歳からという回答であった。前後に正規分布するが、「0歳から使用するのが良い」は3.2%と少ない。しかし粘土場での実践では、現行の1人の保育者につき3人までの子供であれば、誤飲等の危険も回避できると考えられた。

実際に多くの園で持たせている3歳からでなく2歳からの粘土遊びが適切と考える保育者が多いことは、さらに早期の活用が求められており現場の経験をもとに今後のプログラムを考える上で重要な資料となる。

②土の粘土を使った造形遊びを年に一度は行っている。

18.2%の園で土の粘土に年に1度は触れているということと「できれば土の粘土も使わせたい」71.1%ということをお互いに会わせると、ほぼ9割の園で土の粘土を使った保育を希望しているということになる。

③焼き物の制作を年に一度は行っている。

7.6%は想像していたよりも少ない結果であった。焼き物は焼成窯が必要であり、園に窯を設置することは難しいことから、近くの陶芸関係者に依頼することが多い。しかし粘土場の粘土遊びの作品の固定化や卒園制作など実践してみた結果は良好であった。

④全身で遊ぶどろんこ遊びを年に一度は行っている。

どろんこ遊びの80.3%は、土の粘土の18.2%と比べると極めて多い。どろんこの材料として(a) 園庭の土、(b) 砂場での水遊び、(c) 粘土を泥土にしたもの等が考えられる。(c)は他に比べるとぬるぬるして大変人気があるが、当然この遊びは全身で楽しむことが目的で、何かを作るにしても泥団子作りのような遊びになる。「光る泥団子」作りのような遊びに発展することは考えられる。

⑤毎日遊べる状態になっている砂場が園内にある。

96.4%の園が砂場を適切に維持できていることは大変な努力のたまものである。砂はスコップで掘り起こす作業が欠かせず、猫の進入などの問題もありシート掛けや消毒に苦労している園も多い。砂場に水を使ってもよいか、草花などを持ち込んでケーキなどを作っても良いかなど使用方法にも様々な意見や問題がある。何れにしても砂場は重要な遊び場であるためこの状態を維持できることが望ましい。

⑥毎日遊べる土山が園内にある。

46.5%という約半数の園に土山があるということは、多くの場合園庭の広さと関係するであろう。子供にとって起伏のある園庭は遊びが立体化するメリットがある。先のどろんこ遊びもある程度柔らかい土山があればさらに楽しい遊びが展開できる。

⑦個人用粘土は自由な時間にはいつでも使っていることになっている。

68.2%の園で自由に使えるという回答である。しかし個人用粘土は小さな箱にはいっており、各自の棚に収められているため、一人ひとりの箱の中の状態を確かめておくのは難しい。そのために中には、箱の中が少ない子と多い子ができたり、全く遊ばない子ができたりすることがある。

また「本年度使ったことがある粘土」（資料参照）の個人用粘土74.8%はこれに近い。しかし次に見る「設定保育の中でどの程度使いますか」で週1回以上は、9.6%に過ぎない。最も多いのは年に数回43.6%であり、現状では自由な時間での粘土の活用が極めて重要な粘土遊びの機会となっていることが分かる。

⑧個人用粘土は何歳児から全員に持たせていますか。

先に比較したように、最も多いのは3歳の56.4%である。幼稚園との合算であることを考えれば当然であるが、2歳24.7%という点については、今後具体的な調査が必要である。

⑨個人用粘土は設定保育の中でどの程度使います

か。

個人用はない(23.2%) 年に数回(39.3%)
月に数回(18.9%) 週1回(3.5%)
週2~4回(3.9%) ほぼ毎日(1.2%)

個人用粘土の無い園が25.8%ある。この点は共同粘土で補うにしても週1回以上使用する園は9.6%に過ぎない。次に見るように「粘土遊びで子どもが好きだと思うもの」の中で「型抜き遊び」が81.9%であり、「本年度実施した粘土遊びの題材名」の中にも多く出現する点などを考慮すると、自由遊びの時間だけではイメージを膨らませて造形を楽しむことが十分できていないことが浮かび上がる。設定保育の場合、いかに想像や造形対象の自由度を高くするか、つまり環境準備や導入で造形意欲を高めてからどの時点で遊びの自由度を高くするかがポイントとなる。

⑩粘土遊びで子どもが好きだと思うもの(複数回答)

1 型抜き遊び81.9%, 2 動物作り68.4%, 3 食べ物作り95.1%, 4 キャラクター作り23.0%, 5 お団子作り89.4%, 6 ひも作り49.9%, 7 ジオラマ(風景や部屋)4.4%, 8 人間の形19.7%, 9 粘土のひもで粘土板の上に絵を描く13.0%

多いものは、型抜き遊び、動物作り、食べ物作り、お団子作りであり、ジオラマ(風景や部屋)は4.4%、人間の形は、19.7%と少ない。通常の個人用粘土ではジオラマ的な広がりを作ることは難しく好きなもののイメージに入っていないことが想像できる。しかし、粘土場での遊びでは、ジオラマ的な造形遊びの出現率は高い。イメージさえ動き始めれば少量の粘土でもジオラマ的な造形遊びは多くなる。しかし「粘土遊びでできたら楽しいと思う題材名」には、多くの保育者が動物園、遊園地などジオラマ的な遊びを提案したいと考えていることが分かった。

⑪土の粘土の遊びが少ない理由

(a) 準備や片付けが大変32.9%, (b) 粘土の管理

が難しい63.3%, (c) 服が汚れる6.8%, (d) 作品の置き場がない19.4%

(b)「粘土の管理が難しい」という点をどのように解決するかが重要な課題であることが分かる。乾燥した粘土は埃になりやすいため、保育室での使用はきれいなビニールシートを使う必要がある。冬以外の季節に屋外での取り組みから始めて見るのが良い。

(c)「服が汚れる」については、現在行っている各園では保育者はあまり問題にしていない。また保護者へのアンケートでも服が汚れることへの不満はあまり出てこなかった。この点は、土の粘土で遊ばせたいという思いが共有されているものと思われる。

結局、題材感が弱く土の粘土による活動計画が年間計画に入っていないことが一番の理由である。

7. 結論 粘土遊び環境の重要性

環境が与える意味と価値によって始まる粘土遊びについて考察してきた。特に重要なのは子供が遊びを始める瞬間の詳細な観察である。同時に遊びを終えるときの瞬間である。実験心理学に基づく野中哲士との共同研究では、人間のふるまいは環境から与えられる意味と価値によって繊細に直接決定されていることが明らかになってきている。

また木村早苗（松山市立小学校教諭）との共同研究によって、造形思考において子供の頭の中で「映像が動く」状態を大切にすることが、子供自身が絵を描いたり粘土で造ったりする行為の中に入り込むことであることが明らかになってきた。木村は学級

経営や指導上の声かけを一貫した「イメージが動く」環境づくりによって行っている。このクラスでは、常に発想は自由であり型にはまることはない。精神の自由の価値がここにある。

本研究では、土の粘土の使用を推奨する立場で教材論としての側面を意識して出発したが、レッジョ・エミリア市の保育研究や多くの国内の先進的な活動を学ぶにつれて、結局は保育環境全体を生態学的環境として俯瞰することが必要となった。当然の結果とはいえ、いかに幼児期の造形教育が人間形成に重要な活動であるかを知る結果となった。

結論として「ひと・こと・もの」に関する次の3点が挙げられる。

- ①粘土遊びの教育目的は可塑的試行と「行動から始まる思考」によって「学ぶ意欲」を育てることにあり、実践での共通理解が重要である。
- ②「動くイメージ」を伴う造形思考の場としての粘土遊びの事例が多く必要である。
- ③保育現場で活用できる粘土遊びの具体的な環境モデルが必要である。

最後に仮説を提案する。「学ぶ意欲は動くイメージを伴う思考によって自由な遊びの中で作られる」ということである。つまり一つの方法として、粘土遊びの教育的価値を環境として設定することで幼児的性質を長く保つことができれば、抽象と写実に関する「9歳の危機」を乗り越え「精神の自由」を得られる可能性があるということである。ただしそれは、野性を失うこととのバランスの中にある。粘土が、他の造形素材と異なるのは、この可塑性のためである。

(参考) 粘土遊びの計画および月案・週案・日案の例

学年	活動主題 マトリクス	技術	想像	伝達
0歳	座布団 段差道 柔らかめ	ぐにゅぐにゅ 穴にポイポイ ハイハイでお散歩		
1歳	座布団 一本道 柔らかめ	ペッタンお餅つき 高く積もう 歩いてみよう	これなーんだ	
2歳	三つ座布団 三つ山 中くらい	玉転がしコース つなげてみよう へびニョロニョロ お山からジャンプ	空豆くんのベッド しろくまケーキ	粘土でオノマトペ
3歳	三つ山 繋がった山 ジグザグ道 中くらい	ご馳走パーティ 繋がるカバの国 トンネルの国 いろんな歩き方	雪だるまの国 おむすびころりん	美味しいもの
4歳	六つ山 ブロック 一本道 硬め	恐竜博士 迷路の国 人と違う歩き方	怪獣の住む町 冒険島へ行こう 電車で行こう	おとなのお仕事
5歳	大きな山 ブロック 一本道 硬め	動物園に行こう 美術館で見た彫刻 土絵の具アート 動物の歩き方	私の住みたい家 私の住んでいる町 虫の世界	私の夢 園周辺散歩マップ 粘土でお手紙 ぐるんぱの幼稚園パ ン屋さんいくら

9 月 指 導 計 画

つ く し 組

5 歳

検 査 印
検 査 印

<p>子 供 の 姿</p>	<p>○暑さから、疲れは異なれるもの、汗の始末や水分補給を細めにゆとりを持ってとり、熱や熱中症も無く、元気に生活する。 毎日有意義的に様々なことに挑戦したりはりばり起る姿が見られるが、手洗い、片付けなど雑にならないことや、ハンカチを持つてこない子が多い。 生活での約束やルールを守り、周りのことを考えながら動いたり気づいたりする姿が見られてきた。</p>	<p>ね ら い</p>	<p>○気温の変化に応じて保体的で安全な環境をつくり、快適に生活できるようにする。 ☆友達と一緒に楽しく遊ぶ。 ☆身近な自然に触れて遊びながら、初秋の変化に気づき、興味や関心を持つ。</p>	<p>職員間の連絡</p>	<p>○運動会に向け、体力づくりや運動場の使用、当日の準備等を担当者で協力して進めていく。 ○夏の疲れが出やすいのでクラス担任との連絡を十分行っている。</p>	<p>1日(木)清潔検査、身体検査 5日(月)粘土あそび(つくし組) 6日(火)音楽検査 7日(水)誕生日会、お月見会 25日(日)合同運動会</p>
<p>保 育 者 の 内 容</p>	<p>○残暑が厳しく、夏の疲れから生活リズムの乱れや体調を崩しやすいので、一人一人の体調に気をつける。 ○運動量が多くなるので、静と動の活動のバランスに十分配慮し、休息したり水分補給をとる。 ○保育者との信頼関係の中で、自分の気持ちや考えを安心して表わすことができるような、情緒の安定した生活が送れるようにする。 ・友達と一緒に楽しんで食事をして、体と食べ物との関係が分り、一定時間内に食べ終えようとする。 ・戸外で体を十分動かして、様々な運動遊びを楽しむ。 ・友だちの考えに耳を傾けたり、受け入れられたりしながら、相談し合って遊びを進めていく。 ・地域のお年寄りの話を聞いたり、話しかけたりして、親しみを持つ。 ・身近な建物や事象に触れ、驚いたり感動したりして、美しさや不思議さに気づく。 ・友達と一緒に曲に合わせて体を動かして、リズムの楽しさを味わい、自由に表現する。 ・様々な素材を使って遊びに必要なものを作ったり描いたりする。</p>	<p>環 境 を 構 成 す る ポ イ ン ト</p> <p>○生活の場の衛生面に気を配り、清潔な環境をつつておく。 ○水分補給や休息、シャワーが十分できるようにしておく。 ○楽しい雰囲気の中で、食事ができるように環境を整え、食べ物と体の関係の掲示物や絵本、紙芝居を用意する。 ☆運動あそびに必要な遊具や用具を出し入れしやすいように整理しておく。 ・パトランプイン引き・ハチマキ・円すいなど ☆遊びが盛り上がるように楽しんで曲や用具を用意しておく。 ・CDデッキ・CD・ポンポン・バルーンなど ☆園庭や固定遊具の点検整備を十分に行い、安全に遊べるようにしておく。 ☆粘土場の衛生管理を行い環境を整える。 ☆身近な自然に触れて遊ぶ機会を持つ。</p>	<p>予 想 さ れ る 活 動</p> <p>○友達と一緒に楽しく食事をする。 ・食事の大切さを知り、偏りが無いように何でも食べる。 ・食事のマナーを知り、守って食べる。 ○必要な生活習慣の確認をする。 ・手洗い、消毒を丁寧にする。 ・帽子をかぶる。 ・汗の始末や着替えるする。 ・休憩や午睡をして、体を休める。 ☆様々な運動あそびをする。 ・リレー・玉入れ・綱引き・団体操・パルーン・大型遊具など ☆ルールのある遊びを楽しむ。 ・集団遊び・ゲームなど ☆曲に合わせて踊ったり表現したりする。 ☆土の粘土遊びを楽しむ。 ☆自然に触れて遊ぶ。 ・虫とり・種とり・草花摘み、散歩など</p>	<p>保 育 者 の 援 助 と 配 慮</p> <p>○食事が自分の体の栄養と深い関わりのあることを知らせたり、バランスのとれた食事ができるように言葉かけたりする。 ○食べ物と体の関わりについて理解できるように、掲示物や絵本などを利用して何でも食べようとする気持ちを持てるようにする。 ○生活リズムを整え、必要な習慣を直し、子ども自身で話しかけたり、自主的に生活したりできるようにする。 ☆運動会に向けて、個人差を十分に考慮して、一人一人が精一杯頑張っている姿を認めたり、励ましたりして意欲や自信が持てるようにする。 ☆遊具、用具の扱い方については場を促して再確認し、自分で安全に注意して行動できるようにする。 ☆様々な意見が出た時は、友達の間で考えや思いを受け止め、自分とは違う考えがあることにも気づくようにする。 ☆造形遊びでは、イメージが動いていることを確認し、楽しい時間を過ごすことができるように声をかける。 ☆虫とりや種とりをして、自然の仕組みや変化に気づいたり驚いたりする様子に共感しながら、興味や関心が深まるようにする。</p>		
<p>養 育 者 と し て の 取 り 組 み</p>	<p>○夏の疲れが出てくる時期であり、運動量も多くなっていくので、健康状態を細かく連絡し合うようにする。 ○運動会に向けて、一人一人取り組んでいる様子を伝え、理解や協力をお願いする。 ○残暑厳しく、汗をかきやすいので、しばしばシャワーができるように、着替えを用意してもらおう。</p>	<p>保 育 実 践 の ふ り か え り</p>	<p>○残暑は厳しいが、しっかりと水分補給と休息を捕り、バランスを考えて1日を過ごしている。 熱中症に注意するが、中には帰宅して熱したり頭痛を訴える子もいる。 運動会練習も始まり、リレーやダンスなどを楽しみ、暑さに負けず取り組む。 ○4年生の暑と遊ぶことができ、小学探への興味が高まった。4年生が力強く粘土を練ってくれるのを目を見張ってみたい。 粘土遊びなので小学生とも一緒に楽しく遊ぶことができた。</p>			
<p>備 考</p>	<p>○25日(土)に運動会があることをお知らせして、子ども達の成長や姿、園の保育行事に参加していただき、交流や触れ合いの場となるよう機会を持つ。 ○小学校との交流で、「物の粘土から粘土作り」を体験し、4年生と一緒に遊ぶ。</p>	<p>○…生活 ☆…遊び</p>	<p>(1 . 2 . 3 . 4 . 5 歳)</p>			

9 月 第 2 週		つくし 組 5 歳		検印	担任印
生活する姿	<p>○運動会に向け、プログラムを作ると、自らの遊びの中でプログラムを作った楽しさにしたり、友達と一緒にこのころあそびを楽しんでいる。特に4歳児が一緒にいると、いたわったり世話をする姿も見られ、良い経験となっている。</p> <p>朝会をたらず登壇している子もおり、集中ができずにいる。</p>	週ねらい	<p>○体調に気をつけ、快適に過ごす。 ★運動会に向けて、様々な運動あそびを楽しむ。 ★運動会への期待を高める。</p>	家庭とともに	<p>○運動会に向け、一人一人の頑張りを伝えたり、成長を喜び合いながら、見守っているようにする。 又、疲れが出やすい時なので、変化があればすぐ連絡を取り合えるようにしておく。</p>
環境を構成するポイント	<p>○窓を開け、風通しを良くして、快適に過ごさせるよう整えていく。 又、気温に合わせて冷房や扇風機を使用していく。</p> <p>○障害が無く、疲れが出やすいので、水分補給は細めにことり、休息できるスペースやゆとりをとっていく。</p> <p>○汗をかくので、シャワーをして気持ち良く生活できるようにする。</p> <p>★園庭に危険物や危険な箇所は無いが、十分確認する。</p> <p>★室内では好きな遊びができるよう、取り出しやすいよう箱やコゴヘに入れておき、自分たちで準備・片づけができるよう用意する。</p> <p>★月や雲など、秋の自然に関する絵や写真をはり、関心が持てるようにする。</p> <p>★粘土場の粘土の硬さ調節をし、衛生管理に気をつける。</p>	<p>○身の回りの生活へ意欲的に取り組む。 ・手洗いやうがいを丁寧にする。 ・水分補給を細めにことり。 ・次の活動への準備など、自ら考えて取り組む。 ・使った物は片付ける。</p> <p>○マナーを守って食事をする。 ・椅子に姿勢を正して座る。 ・三角食べをする。 ・こぼれたら拭く。 ・旬の食べ物を知り、味わう。</p> <p>★園庭で遊ぶ。(大型遊具・砂場・かけっこなど) ★室内で遊ぶ。(ブロック・ままごと・買い物ごっこ・粘土・絵描きなど) ★歌を歌う。(「人間っていいな」「くまの列車」「大きな栗の木の下で」) 「すずめがサンバ」「うたごえのうた」など)</p>	<p>○自らの生活に意欲的に取り組む姿勢を十分見守り、丁寧にできるよう、更に先を見送って一人一人に対応していく。</p> <p>○挨拶や運轉など、自らできるようなその都度伝え、習慣にする。 ★気候も考え、体をしっかりと動かしたり、秋の自然の移り変わりを感ぜながら遊びも広げていけるようにポイントをとらえていく。</p>		
予想される活動	<p>粘土場の窓をあけ、シートを敷くなどして、快適に遊びが始められるように整えておく。 粘土を取り出しやすいよう用意し、スモックを出しておく。足を拭く雑巾を手の届くところへ置いておく。</p> <p>大量の粘土を使って自分の思いやイメージを伸ばし伸びと表現できるようにする。</p>	<p>絵面を用意したり、出し物、プレゼント、カードを置いていたり、楽しい雰囲気づくりをする。 カーペットを敷いたり、椅子を用意して、落ち着いて参加できるようにする。</p> <p>一人一人の思いやイメージを大切に受け止め、更に膨らませながら伸び伸びと描けるようにする。</p>	<p>円すい、ライオン引き、ハチマキ、バトン、救急用具、笛を用意しておく。 遊具を取り出しやすいよう、カゴへ入れて出しておく。</p> <p>運動会に期待を持ち、自信を持って走ったり、応援し合ったりする気持ちを持つよう盛り上げていく。</p>	<p>園庭に危険物は無いが、十分確認しておく。 遊具を取り出しやすいよう、カゴへ入れて出しておく。</p> <p>異年齢児との関わりを持ちながら、見守る。</p>	
保育者の援助と配慮	<p>広い場所での響きや動きを持って取り組めるよう配慮する。</p>	<p>お月見会では習わしなどを聞き、月や秋への移り変わりに関心を持つ。</p>	<p>一人一人の思いやイメージを大切に受け止め、更に膨らませながら伸び伸びと描けるようにする。</p>	<p>運動会に期待を持ち、自信を持って走ったり、応援し合ったりする気持ちを持つよう盛り上げていく。</p>	
保育実践のふりかえり	<p>5日(月) 音楽教室 ◎マーチング隊をする。 (体育館練習) ・意欲的に取り組む、初めてだが、緊張もなく、印をしっかりと見ている。 ・片付けも自ら進んでしている。</p> <p>6日(火) 音楽教室 ◎マーチング隊をする。 (体育館練習) ・意欲的に取り組む、初めてだが、緊張もなく、印をしっかりと見ている。 ・片付けも自ら進んでしている。</p> <p>7日(水) お月見会に参加する。 お月見会では月の話や習わしを知り、関心を持って話を聞くことができていた。</p> <p>8日(木) 絵画教室 ◎絵を描く。 ・サインペンや絵の具を使って思い思いに描いていく。 ・細かくしっかりとぬることが好きな子が多く、楽しんでいる。</p> <p>9日(金) 運動会 ◎運動場で遊ぶ。 ・応援し合ったり走ることを楽しんでいる。</p> <p>10日(土) 運動会 ◎園庭で遊ぶ。 ・天候も良く、伸び伸びと遊んでいる。 ・少し暑くなると陰を探して遊ぶ。</p>	自己評価	<p>様々な競争あそびをする。チームでの協力や回轉することの大切さを知らせるとその気持ちで大切にし、思い合ったりできる。小さな困難で戸惑う子もいるが、自分で切り開いていける自信と力を育てたい。 造形遊びでは、環境から病める活動を心懸けることができた。</p>		
子どもたちの	<p>週を通した活動・日に対応した活動</p>				

日 案

3 月 9 日 金 曜 日	つくし 組 5 (15人) 歳	検 印		担 任 印	
子供の姿 ○インフルエンザなどの感染症予防に関心を持ち、手洗い、うがいに丁寧に 取り組み、鼻水を拭いたり、体調の悪い時は早めに知らせたりしながら元気に 生活できている。 ○食後は毎日、友達とグループになり、自分達で ルールや順番を決め、仲良く じっくりと遊びに入っている。 ○文字に関心を持ち読んだり書いたりすることを楽しむ姿が見られる。カタカナにも 興味を持っており、4月の入学をとても楽しみに生活している。 ○自由遊びの時間には粘土を出して楽しく遊んでいる。	ね ら い ○手洗い、うがい、歯みがきなど、清潔にすることの気持ち良さを味わい、 丁寧に遊ぶ習慣を身につける。 ○形をイメージして作ることに関心を持ち、みんなで一緒に作ったり、形にして表現する 面白さを味わう。 ○友だち同士で協力したり認め合いながら相手の気持ちや存在を大切にしている。				

時間	環境構成	予想される子どもの活動	保育者の援助・配慮
----	------	-------------	-----------

<9:30> <9:45> <10:00> <10:15> <10:45> <11:20> <11:30>	場所(つくし組保育室) 入口 ○気温に合わせて暖房を入れたり 換気しながら室温調節をし、 快適に生活できるよう配慮する。 ○粘土がすぐ出せるように準備し しておく。(コンテナに小分けしておく) ○粘土が十分追加できるように準備し しておく。 (準備物) 粘土(1人3kg)、クレヨン、模造紙 予備の粘土30kg	◎「ぐるんぱのようちえん」を読んで粘土遊びをしよう。 ○朝の集いをする。 ・挨拶をする。 ・日にちを言う。 ・名前を呼んでもらう。 ・今日の予定を聞く。 ○協力して模造紙を敷く。 ○保育者の前に集まる。 ○保育者の話を聞く。 ・「T「ぐるんぱのこと知っているかな」 ・「T「ぐるんぱは大きな象さんなんだけど困っていることが あるんだって」 ○「ぐるんぱのようちえん」の絵本を観る。 ・気付いたことや知っていることを言う。 ・次にどうなるか予測して発言する。 ・ぐるんぱの気持ちについて発言する。 ○保育者が象を作るのを見る ・「T「鼻はどれぐらい伸びるかな」 ・「C「上を向いてる」 ・「C「目も作って」 ○ぐるんぱの幼稚園のイメージを粘土でつくる。 ・「T「先生頑張ってつくるから、皆もぐるんぱを助けて あげて」 ・「C「ピアノや靴もつくりよう」 ・「C「一緒にかくれんぼしよう」 ○クレヨンを出して模造紙に絵を描く。 ○机を寄せて皆の象を机上の一角所に集めて話し合 う。 ・「T「なにをしているところかな」 ○片付けをする。 粘土はコンテナに戻す。 ○手洗いをする。 ○昼食の準備をする	○朝の集いの準備を行い、安心して入室できる雰囲気づくりをする。 ○一人一人の表情をしっかり把握し、1日のスタートを気持ち良く 始められるよう、挨拶を交わす。 ○1日の予定を分りやすく知らせ、見通しを持って生活に入って いけるよう話す。 ○模造紙がしわにならないように丁寧に渡し協力して敷くことができ るように声をかける。 ○よく知っている子にも始めての子にも発言しやすい質問をする。 ○ぐるんぱが困っていることを強調して物語を自分と関係づけて考えら れるようにする。 ○ゆっくりと読む。子供達に問いかけたり、発言を取り上げたりしながら ゆっくり進めていき、子供達のお話しに対する思いを深めていく。 ○技術的な指導をするのではなく、象の形や気持ちや動きについて話しな がら粘土の可塑性、接着性、可動性等について気付かせる。 ○保育者自身が考えながら形作ることを楽しんでいる様子を見せる。 ○一人一人の思いを受けとめ何をつくってもいいんだという雰囲気 を大切にする。 ○イメージが動いて行くように粘土が不足しないよう追加するなど注意 する。(予備の粘土はコンテナに入れて蓋をしておく) ○クレヨンで模造紙に絵を描きたしてみせる。 ○自分の園のことや隣の子の絵などに注意を向けさせ、遊びの発想を 広げることができるようにする。 ○皆のぐるんぱが集まって楽しい気持ちを共有するとともに、他の子の 作品を鑑賞し尊重する気持ちをふくらませる。 ○楽しかった思いを一人一人大切に受け止め、片付けができるよう 配慮する。 ○石けんで丁寧に洗うよう声をかける。
---	--	---	---

評 価 及 び 反 省	導入からぐるんぱについて自分の考えが発表できた。導入後もぐるんぱについてのイメージが継続し、一人ひとりがイメージを動かすことができ物語の中に入って遊ぶことができた。造形的に難しい形も工夫してつくることができた。 友達と協力して相手の考えを取り入れながら遊ぶことができた。 粘土の硬さの設定がやや柔らかく思い象の胴体を載せる足がつくりにくい子がいた。
----------------------------	--

(2) 本年度使ったことのある粘土すべてに○をつけてください。

個人用粘土 土の粘土 紙粘土 小麦粉粘土 木質粘土 スライム
片栗粉 オイルクレイ クレイアニメ用粘土 その他の粘土類

()

3 指導内容について

- (1) 粘土は何歳頃から使用するのが良いと思いますか () 歳頃
- (2) 土の粘土を使った造形遊びを年に一度は行っている。 はい ・ いいえ
- (3) 焼き物の制作を年に一度は行っている。 はい ・ いいえ
- (4) 全身で遊ぶどろんこ遊びを年に一度は行っている。 はい ・ いいえ
- (5) 毎日遊べる状態になっている砂場が園内にある。 はい ・ いいえ
- (6) 毎日遊べる土山が園内にある。 はい ・ いいえ
- (7) 個人用粘土は自由な時間にはいつでも使っていていいことになっている。 はい ・ いいえ
- (8) 個人用粘土は何歳児から全員に持たせていますか。 () 歳児クラスから
- (9) 個人用粘土は設定保育の中でどの程度使いますか。 1つに○をつけてください。
個人用はない 年に数回 月に数回 週1回 週2~4回 ほぼ毎日

- (10) 粘土遊びで子どもが好きだと思うものに○をつけてください。(複数可)
型抜き遊び 動物作り 食べ物作り キャラクター作り お団子作り ひも作り
ジオラマ(風景や部屋) 人間の形 粘土のひもで粘土板の上に絵を描く
その他子どもがよく作るもの ()

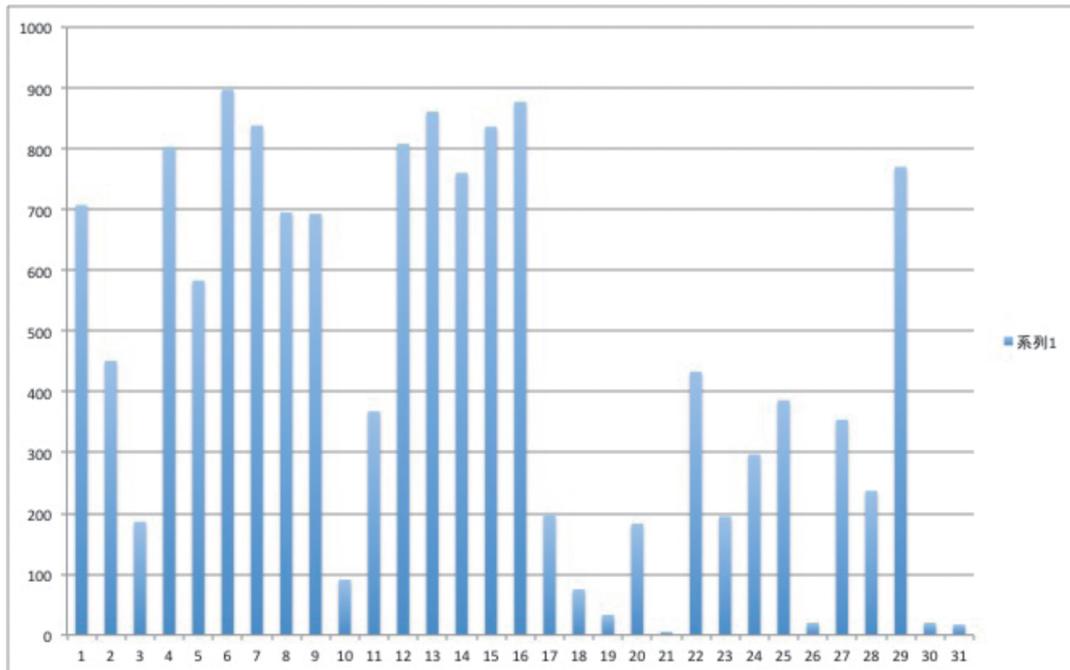
- (11) 土の粘土の遊びが少ない理由について、そう思うものに○をつけてください。(複数可)
準備や片付けが大変 粘土の管理が難しい 服が汚れる 作品の置き場がない
その他 ()

- (12) 本年度実施した粘土遊びの題材名をお書きください。(複数あればできるだけ多くお願いします)
(例)「カタツムリのお家」「型抜きで七夕」「私の好きなもの」

- (13) 粘土遊びでできたら楽しいと思う題材名を2つ以上ご提案ください。
(例)「私の住みたい家」(5歳)「エルマーを読んで」(4歳)「お団子コロコロ」(3歳)

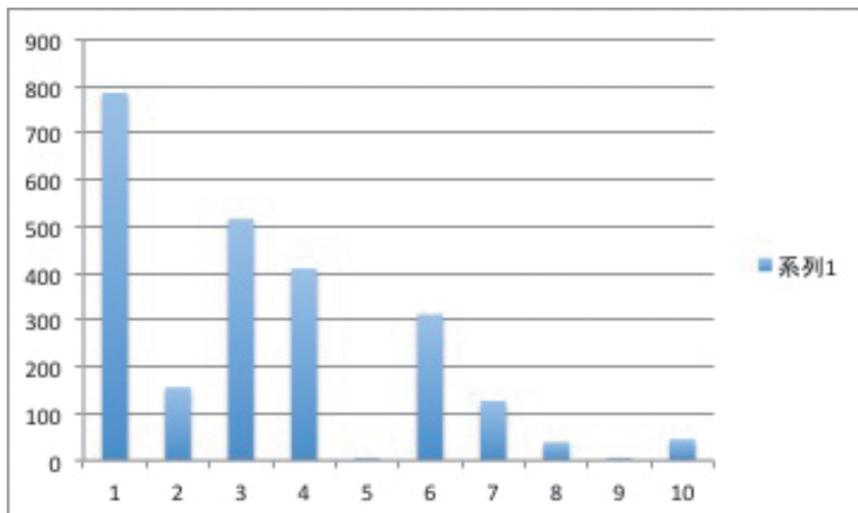
ご協力ありがとうございました。ご意見がございましたら裏面にご自由にお書きください。

(資料) 道具や材料の準備状況 (n=1051)



- 1 個人用クレヨン 67.3% 2 個人用パス 42.9% 3 個人用絵の具 17.7% 4 個人用画帳 76.5%
- 5 共用絵の具 55.5% 6 鉛筆 84.4% 7 色鉛筆 79.7% 8 個人用マーカー類 66.1 9 共用マーカー類 65.9%
- 10 カラーインク 8.7% 11 模造紙 35.0% 12 積み木 77.0% 13 ブロック 81.9% 14 個人用粘土 72.4%
- 15 粘土ペラ 79.6% 16 粘土板 83.4% 17 共用粘土 18.9% 18 土の粘土 7.1% 19 クレーカッター 3.1%
- 20 めん棒 17.4% 21 砂箱 0.5% 22 段ボール 41.2% 23 木材や木切れ 18.6% 24 布類 28.3% 25 木の実 36.7%
- 26 ナットのような金属類 1.9% 27 ビーズやボタン 33.7% 28 短くなったクレヨンを集めた入れ物 22.5%
- 29 自由に使っていい絵を描く紙 73.3% 30 イーゼル 1.9% 31 影絵の準備 1.6%

本年度使用した粘土の種類



- 1 個人用粘土 74.8%
- 2 土の粘土 14.8%
- 3 紙粘土 49.1%
- 4 小麦粉粘土 39.0%
- 5 木質粘土 0.5%
- 6 スライム 29.7%
- 7 片栗粉 12.1%
- 8 オイルクレイ 3.7%
- 9 クレイアニメ用粘土 0.5%
- 10 その他の粘土類 4.3%

引用文献・参考文献

- 1) 高橋敏之『レッジョ・エミリア保育実践の受容と新しい学術体系としての幼年造形教育学の構築』平成16年度～平成19年科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書，2008
- 2) 大橋功，新関伸也，松岡宏明，梅澤啓一『造形表現指導法』東京未来大学，2008
- 3) エドワード・S・リード（細田直哉訳，佐々木正人監修）『アフォーダンスの心理学』2000
- 4) J. ギブソン（佐々木正人，古山宣洋，三嶋博之訳）『生態学的知覚システム』東京大学出版会，2011
- 5) J. ギブソン著（古崎敬訳）『生態学的視覚論』サイエンス社，1986
- 6) レッジョ・チルドレン ドムス・アカデミー・リサーチセンター『子ども，空間，関係性』学習研究社
- 7) J.ヘンドリック編（石垣恵美子，玉置哲淳監訳）『レッジョ・エミリア保育実践入門』北大路書房，2000
- 8) J.ホイジンガ（高橋英夫）『ホモ・ルーデンス』中央公論社，1963
- 9) R.カイヨワ（清水幾太郎，霧生和夫訳）『遊びと人間』岩波書店，1970
- 10) アンリ・ワロン（滝沢武久訳）『認識過程の心理学』大月書店，1962
- 11) V.ローウェンフェルド『美術による人間形成』黎明書房，1995
- 12) J.ピアジェ（滝沢武久・銀林浩訳）『量の発達心理学』国土社，1965
- 13) 林健造『育ち育てる絵の指導』フレーベル館，1979
- 14) 岡田清『幼児の絵の見方』創元社，1967
- 15) 小谷隆真『新しい表現遊び』すずき出版，1994
- 16) 無藤隆『幼児教育のデザイン 保育の生態学』東京大学出版会，2013
- 17) 前嶋英輝「粘土場の遊びと環境」『美術教育NO.292』2009
- 18) H.ガードナー『多元的知能の世界 MI理論の活用と可能性』三晃書房，2003

協力

高梁中央保育園（岡山県），高梁落合保育園（岡山県），ゆうき幼稚園（広島県）
 千里敬愛幼稚園（大阪府），大地太陽幼稚園（北海道），和光保育線（千葉県）
 ロリス・マラグッチ国際センター（伊：レッジョ・エミリア市）
 ラファエロ幼稚園（伊：ボローニャ市）
 ラ・チネマ保育園（伊：ボローニャ市）
 タプニシリバ幼稚園（トンガ王国）
 「きのこの森」陶芸館（福井県）

本研究はJSPS科研費の助成を受けたものである。（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））

研究課題名「粘土遊びに関する幼児造形教育法の確立」

（JSPS KAKENHI Grant Number 23531271）補助事業期間（平成23年～25年度）

研究課題名「幼児造形教育の環境設計と指導法の確立」

（JSPS KAKENHI Grant Number 26381241）補助事業期間（平成26年～28年度）